

展望 「洋式の教へ」など

水辺あお

一八八二年（明治15）にイタリヤのローマ

で生まれ、「伊都子」（伊太利の都の子）と名づけられた華族の次女がいた。父は旧佐賀藩主の鍋島直大侯爵で、当時は駐伊特命全権公使であった。伊都子は生後七か月で帰国し、のちに皇族の梨本宮守正と結婚した。長女は朝鮮王妃となった李万子である。

伊都子は戦後、皇籍離脱して一般市民となったが、物心ついたころから書きはじめた日々の日記を亡くなる直前まで欠かさず書き、自分の半生を回顧する手記を残した。幼少より歌塾「萩の舎」主宰の中島歌子に和歌や書を読んでおり、和紙綴じの自筆和歌集も数多くまとめた（『梨本宮妃伊都子の日記』小学館）。「伊都子の残した手記のひとつに『心得ぐさ』がある。「昔、父上より教へていたゞきたる嬖方の歌」として、「古式の部」61首、「洋式の教へ」24首、計85首の和歌が記されている。

「古式の部」には幕末維新当時の教えがあり、たとえば新しい時代の君主となった天皇や皇族に対する言葉遣いが詠まれた。

行幸は当今をこそ申すなり院は御幸宮は

幸啓

今上天皇のお出かけは行幸、院は御幸、宮家は幸啓と区別があつたのだ。

「洋式の教へ」には、維新後の時代に即した西洋式の礼儀作法が詠まれた。

夫婦づれ馬車にのる時妻は右夫は左とかねて知るべし

女子にして貴人の前に礼するに胸はまげても首はまげらな

物くうにホークナイフはそろへ置け開きておくはいなかもものなり

立食はまづ貴婦人にす、むべしわれはおくれて賞かんすべし

祝盃はげこといへども一杯はつぎて祝詞を言せよろしき

われ先に貴き人のとらぬまにナブキンとるは無礼なりけり

鹿鳴館時代当時の社交の心得であつた。なお和歌形式で作法や心得などを詠みこむものは茶道の「利休百首」などが知られる。

何にても置き付けかへる手離れは恋しき人にわかるると知れ

道具から手を離すときは恋人と別れるかのようになごりおしく、という作法の心得だ。

また、作法心得のみならず煩雑な官位、唐名などを覚えるための虎の巻もある。公家は平素の務め上、官位やその唐名を知るのは必須のことだ。また『源氏物語』など中世の文学を読むにあたって、登場人物は名前ではなく官職で書かれることが多い。左大臣、頭中将などと称され、また中将の君がいつしか大将の君になったりする。

こうした官職の要諦を165首の和歌にしてまとめたのが『和歌職原鈔』（『東洋文庫758』所収）である。室町末から江戸初の公家で右大臣の今出川（菊亭）晴季の作という。

内大臣。左大臣また。右大臣。正従二位を。相当としれ。

内大臣も左大臣も右大臣も位階は正二位、従二位であることを詠んだのだ。

大納言。唐名は重相。中納言。黄門なれば。参議相公。

水戸藩主で中納言であつた徳川光圀が水戸黄門と称された理由も理解できよう。

5・7・5・7・7という和歌形式の心得や虎の巻が成立する背景には和歌の普遍性と、その韻律に備忘効果があつたからだろう。和歌形式は強い。